



指導主事だより

なんだか うれしい

教育委員会

相談時間等

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話0267-56-3131 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話0267-56-1076 (呼)
- 立科町児童館/
午前11時50分～午後1時40分
電話0267-56-0248 (呼)

〔担当 指導主事 中島一彦〕

立科小学校を卒業して、中学校に進学した女の子がロシアのウクライナ侵攻に対して、「お父さん、どうにか戦争を止めることはできないの?」という問いを父親に向けてきたということをお聞きしたことがありました。そして、その子が「大統領を殺してしまえば・・・」というような思いを父親にぶつけてきたと言うのです。

それに対して、**明確に否定できない自分を見つめながら、父親として返答に窮してしまった**という内容を付け加えていただきました。

お父さんは、おそらく、言葉が失われたり、小さくさせられたりするものの一つとして「暴力」があるという事実を数えきれないほど、経験している方なのだと思います。

私たちは暴力の非を言いながら、子

どもたちを数値や競争で比較してしまう。できる子、できない子という区別をしてしまう。それもまた暴力です。そういうわが身を省みながら、暴力を拒み、互いに声を聞き合う場を生み出していくしかないのではないか・・・そんな思いを伝えてくださったお父さん。

対話がコミュニケーション能力をつけるとか、内容を深めるとかというだけではなく、目の前の相手の声に「聴きたい」という思いを向けられるか、そこに非暴力の思いは芽生えていくはずだ。

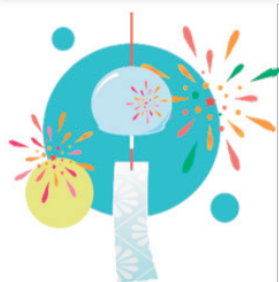
日本という国にしながら、今起きている世界の巨大な暴力にほとんど抵抗することはできません。たくさんの人が死んでいて、怒りや悲しみを感じて、何かしたいと思っても、何も出来ないまま時間が流れていく。考えれば考えるほど無力感にとらわれます。いや無力感さえ覚えないう遠い国での出来事として終わってしまう。

ただ、そこで重要なのは、戦争を止めるという大きなことでなくても、活動一つで世の中がパッと変わることなんてないとしても、いやそれでもできることをやるしかないという気持ちへの切り替えが大切なんだろうと思います。

対 話



立科町西塩沢から



何気ない会話、たくさんの対話を重ねていく家庭や学校であってほしい。考えたことを言葉にすることは、その子の独自の世界をひらく表現行為ともいえます。日々の様々な出来事を通して、あるいは読書や絵本を介在して、また父母の生き方や仕事を通して、子どもたちと対話を生み出していく。

鏝や決まりだけの話ではなく、何気ない日常の暮らしから生まれてくる問いや、つぶやきに耳を傾けていると、子どもたちの思いや願いが見えてきます。

「ねえ、お母さん、風って何色」なんて聞かれたら、どう答えましょうか?